

中学生における”自己”および”友人”の見せかけの自己表現に対する認知とストレス反応の関連

橋詰, 郁恵
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/18459>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 11, pp.185-193, 2010-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

中学生における“自己”および“友人”の見せかけの自己表現に対する認知とストレス反応の関連

橋詰 郁恵 九州大学大学院人間環境学府

A relationship between cognition of false self-expression of ‘the self’ and ‘friends’ and stress responses among junior high school pupils

Ikue Hashizume (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

The purposes of the present study were: (1) to construct the scale for cognition of false self-expression of ‘the self’ and ‘friends’; (2) to examine the relationship between cognition of false self-expression and stress responses. Questionnaire was completed by 496 junior high school pupils. Results of the factor analysis yielded two factors: (1) positive cognition, (2) negative cognition. Furthermore, results of the cluster analysis revealed four styles of cognition of false self-expression of ‘the self’ and ‘friends’: (1) weak positive type, (2) positive and negative type, (3) negative type, and (4) strong positive type. Results of the ANOVA suggested that pupils with the “a little positive type” had little stress responses. Many pupils belong to “weak positive type”, and they had good relationships with their friends. However, girls with the “strong positive type” had the most stress responses, and they tended to be maladjusted. Finally, pupils with the “negative type” had little stress responses, so they tended not to show false self-expression.

Key Words: junior high school pupils, false self-expression, stress responses

I 問題と目的

1. 中学生の友人関係について

中学生は思春期にあたり、Blos (1962) はこの時期を“親から精神的に離れ、自立し、個を確立していく過程として、「第二の個体化過程 (second individuation process)」とした。よって、中学生は親よりも友人の方が大切になり、友人関係の構築が課題となるとされる。中学生に見られる友達との付き合い方の特徴として、落合ら (1996) は、“自分の本音が問われるようなことは避け、自分を守ろうとする「自己防衛的なつきあい方」をあげている。しかし、吉岡 (2001) は、“中学生は相手に自分のことをわかってもらいたい、何でも話し合い、相談しあったりして、相手とわかり合いたいと友人との関係を理想としては求めているが、実際にはそのような付き合い方ができていないと感じている”ことを指摘している。よって、「自己防衛的なつきあい方」を求めて、そのようなつきあいをしているのではなく、親密な関係を求めてはいるものの、実際にはそのような関係を築くことができていない中学生の存在が考えられる。一方で“中学生にとっては、「友人との関係」は学校への適応感に強い影響力をもっている” (大久保, 2005)。以上より、本研究では中学生の友人関係に注目し、心理的援助の一助となることを目指す。

2. 自己表現について

(1) ありのままの自己表現とは

“自己の内面的な世界を他者に知らせるという行為は、社会的な存在としての人間には欠かすことのできないものである” (榎本, 1997)。自己開示を初めに心理学研究の対象とした Jourard (1971) は、“自己開示は、自分自身をあらわにする行為であり、他人たちが知覚するように自身を示す行為である”と定義している。松島 (2004) も、自己開示を“自分自身についての情報を、他者に言語的にありのままに伝えること”と定義しており、自己開示とは自分のことを偽ることなく、他者に本音で話すことと考えられる。

自己開示研究の際に用いられる質問紙では、相手に話す際に「偽っている」と答えた場合は、「全く話したことがない」と同様のものとみなしているものがある (榎本, 1987)。しかし、一般的には、特定の他者に対して「どの程度話しているか」と教示し、「まったく話したことがない~十分に話してきた」の5段階評定をするように求めるものが多い (例えば、榎本 (1997)、渋谷・伊藤 (2004)、和田 (1995))。その結果、定義としては本音で話すという意味合いのある自己開示の研究において、「話してはいるが、本音を話しているのではない」という被験者を見落とすことになっていると思われる。よって、本研究では、本音ではない自己表現に焦点をあてる。

(2) 中学生の自己表現の現状

“素直に自己開示できる親密な関係をもつことが、精

神的健康の増進のために必要であり” (榎本, 1997), 友人に本音を話すことは重要である。中学生という時期は思春期前半にあたり, この時期によく見られるチャムグループでは, 互いの共通点・類似性を確かめあうのが基本になっている (保坂, 1998)。よって, 中学生という時期は友人との同質性を求める段階であるため, 自分を率直に表現することには困難が伴い, 本音を話すことができにくい時期であると考えられる。

また, 中学生の現状として, “思春期の子どもたちは仲間から排除されはしまいかという同調圧力に絶えず脅かされ, 気をつかい, くだびれはててしまっている” (諸富, 1999) ことや “互いの関係を壊さないように一生懸命気を遣い, 相手との距離をはかることに心を砕く子どもが多い” (伊藤, 2006) ことが報告されており, 自分の本音を抑えてでも相手に合わせるために, 友達とのつきあいに疲れを感じている中学生の存在が考えられる。

3. 見せかけの自己表現に対する認知について

(1) 見せかけの自己表現とは

友人に気遣いをし, 本音をださないようにする中学生は, 友人関係においてどのようにふるまっているのだろうか。堀田ら (2001) は, “本当はやりたくないことでもみんなに付き合う, 友達の発言に傷ついたときでも自分の感情はみせないなどを見せかけの自己行動” としてあげている。そして, “適度な配慮や共感的態度は, 友人関係の適応感や精神的健康とプラスに関連する” と報告している (堀田ら, 2001)。吉岡 (2007) も, “友人関係の満足感が高いものは, 状況に応じて自己の在り方を柔軟に調節できている” ことを明らかにしており, 本音を抑えることがいつも不適応をもたらすのではなく, 友人とうまくやっていくために必要であるとも考えられる。

本研究では, 堀田ら (2001) を参考に「本音とは違うことを言ったり, 本音とは違うようにふるまったり, 本音をださないこと」を見せかけの自己表現と定義する。堀田ら (2001) の定義では, 「本当の自己」という用語が用いられていたが, 青年期の危機として, Erikson, E. H. (1950) が “アイデンティティ対アイデンティティの拡散” をあげているように, 青年期は本当の自己がはっきりしていないため, 本音という用語を用いる。

(2) “自己” の見せかけの自己表現に対する認知について

見せかけの自己表現が, 不適応をもたらすかどうかは, 見せかけの自己をどのように認知しているかによって異なると考えられる。堀田ら (2001) は, 中学生が本当の自己と違うように振舞う「自己」にどのような意識をもつかについて検討した結果, “つかれる” といった否定的感

情と「自然なことだ」といった肯定的感情を見出し, 青年期には, それをどのように捉えるかが重要である” と指摘している。しかし, 堀田ら (2001) の肯定的・否定的感情に関する項目は5項目ずつと少なく, 信頼性も低いため, 再検討する必要がある。

また, 佐久間 (2006) は, 中学生・高校生・大学生は, 様々な人間関係に応じて変化する自己に対して “「演じているようで嫌だ」といった否定的意識に発達差は見られなかったが, 「必要」「自然」といった肯定的意識は年齢があがるにつれて増加する” としている。以上より, 中学生は見せかけの自己に肯定的な意識を持ちにくい段階ではないかと思われるため, “自己” の見せかけの自己表現をどう認知しているのかについて着目することとする。

(3) “友人” の見せかけの自己表現に対する認知について

これまで自分が本当の自己と違うようにふるまうことに関する研究は行われているが (堀田ら, 2001; 佐久間, 2003; 渡部ら, 2006), “友人” が “自己” に対して見せかけの自己表現をすることに焦点をあてた研究は行われていない。

岡田 (1999) の研究において, “友人が表面的な関係を求めているから自分も表面的な関係をとっているだけであり, 理想としては親密で内面的な関係を求めている” ことが明らかにされている。これは, 友人がどのような付き合い方をしているのかという認知が, 自分の友人に対する付き合い方に影響を及ぼすということを示している。

ところで中学生のつきあい方に “自分の本音が問われるようなことは避け, 自分を守ろうとする自己防衛的なつきあい方” (落合ら, 1996) がある。そのような中学生が, 友人も防衛的であることを求めるとすれば, 友人が本音を抑えることを肯定的に認知するだろう。そのことを明らかにするためにも “友人” が “自己” に対して見せかけの自己表現をすることをどう認知しているかということについて検討することには意義があると思われる。

(4) 見せかけの自己表現の認知についての性差

中学生の自己開示では “女子は男子に比べて開示度が高い” (渋谷ら, 2004) ため, 女子の方がお互いの本音を開示しあうような付き合いを求めていると考えられる。よって, 本研究では見せかけの自己表現の認知の性差についても検討する。

4. “自己” および “友人” の見せかけの自己表現に対する認知とストレス反応の関連

三浦 (2006) は, 中学校において心理的ストレスに関するチェックリストを実施しており, ストレス反応は,

中学生の適応状態を知る有用な視点であると思われる。奥野ら (2007) は、“中学生において、言語的主張をあまりしない場合に、ストレスを溜めるものもいれば溜めない生徒も存在する”としているが、この相違がなぜ生じるのかについては明らかにしていない。この相違は、言語的主張をあまりしない、つまり見せかけの自己表現をする自己をどう認知しているかという事から生じていると考えられる。また、堀田ら (2001) は、“本当の自己と違うように振舞ったとしても、その自己をどう認知するかによって、中学生の適応感は異なる”としており、“自己”の見せかけの自己表現の認知とストレス反応の関連を検討する必要があると思われる。

また、“現代の青年の友人関係の特質として、内面的なかかわりを避け表面的な楽しさを追い求める傾向” (岡田, 1995) が指摘されている。この傾向にある中学生は、“友人”が“自己”に対して本音を見せないことを肯定的に認知するという推測が可能であり、彼らはストレス反応を表出しないという特徴が予想される。

本研究では、“自己”および“友人”の見せかけの自己表現に対する認知とストレス反応の関連を検討することとする。

5. 目的

以上より、本研究では中学生における“自己”の見せかけの自己表現に対する認知および“友人”の見せかけの自己表現に対する認知を測る尺度を作成する (第一研究)。また、“自己”および“友人”の見せかけの自己表現に対する認知とストレス反応との関連について性差を考慮に入れながら検討する (第二研究)。

II 第一研究

1. 目的

“自己”の見せかけの自己表現に対する認知および“友人”の見せかけの自己表現に対する認知を測る尺度を作成する

2. 方法

(1) 調査対象：中学1・2・3年生 (2校) に対して調査を行い、回答に不備のなかった496名 (男性239名、女性257名) を分析の対象とした。

(2) 調査時期・調査手続き：2008年10月中旬～11月中旬。質問紙法、無記名。配布・回収はクラス担任に依頼した。

(3) 調査内容：堀田ら (2001) の見せかけの自己行動の感情尺度、佐久間 (2003) の関係的自己の可変性における変化意識の尺度の項目に加え、筆者が必要と考える項目を加えて質問項目を作成し、心理学を専攻する大学

院生3名により、項目の内容妥当性が検討された。「あなたが友達に対して (友達があなたに対して) 本音とはちがうことをいったり、本音とはちがうようにふるまったり、本音をださないことについてどう思いますか」と教示し、“4：そう思う”～“1：全く思わない”の4件法で回答。“自己”の見せかけの自己表現の認知30項目、“友人”の見せかけの自己表現の認知31項目。

(4) 分析方法：尺度の因子構造を検討するため、因子分析を行う。

3. 結果

(1) “自己”の見せかけの自己表現に対する認知因子分析 (主因子法・プロマックス回転) の結果、2因子22項目が抽出された (Table 1)。

Table 1
“自己”の見せかけの自己表現に対する
認知尺度の因子分析結果
(主因子法・プロマックス回転後の因子パターン)

	1	2
第1因子「肯定的認知」因子 (11項目, $\lambda = .89$)		
ふつうのことだ。	.74	-.10
当たり前のことだ。	.71	-.09
大切なことだ。	.71	.08
しかたがないことだ。	.69	.16
適切なことだ。	.69	.13
必要なことだ。	.68	.02
よくあることだ。	.67	.06
しぜんなことだ。	.64	-.04
いいことだ。	.56	-.02
抵抗がない。	.52	-.13
優しい。	.48	.03
第2因子「否定的認知」因子 (11項目, $\lambda = .88$)		
本当はやりたくない。	.00	.71
自分のことが分からなくなるようでこわい。	.01	.68
つかれる。	.21	.68
不自然だ。	-.03	.65
悲しい。	.02	.64
自分を疑ってしまう。	.03	.63
気持ち悪い。	-.07	.60
演じているようで嫌だ。	-.12	.59
友だちに気を使っている気がする。	.26	.58
悪いことだ。	-.23	.54
相手に申し訳ない。	-.20	.53
因子相関行列	1	2
	1	-.44
	2	

第1因子は、「ふつうの事だ」、「当たり前のことだ」などの項目が高い負荷量を示していたことから、「肯定的認知」因子 ($\alpha=.89$) と命名した。第2因子は、「本当はやりたくない」、「自分のことが分からなくなるようでこわい」などの項目が高い負荷量を示していたことから、「否定的認知」因子 ($\alpha=.88$) と命名した。

(2) “友人” の見せかけの自己表現に対する認知

因子分析(主因子法・プロマックス回転)の結果、2因子28項目が抽出された (Table 2)。

Table 2
“友人” の見せかけの自己表現に対する
認知尺度の因子分析結果
(主因子法・プロマックス回転後の因子パターン)

	1	2
第1因子「肯定的認知」因子 (17項目, $\alpha=.91$)		
しぜんなことだ。	.77	.04
ふつうのことだ。	.75	-.08
必要なことだ。	.73	-.04
しかたがないことだ。	.73	.06
適切なことだ。	.73	.07
当たり前のことだ。	.71	.00
大切なことだ。	.70	.02
よくあることだ。	.70	.13
いいことだ。	.63	-.06
えらい。	.58	.09
抵抗がない。	.57	-.10
優しい。	.54	.00
良い面も悪い面もある。	.51	.28
苦しいことではない。	.49	-.20
私に気がつかってくれるようでうれしい。	.49	.03
どうでもいいことだ。	.47	-.16
あまり意識したことがない。	.36	-.14
第2因子「否定的認知」因子 (11項目, $\alpha=.90$)		
本当はしてほしくない。	-.08	.75
友だちのことが分からなくなるようでこわい。	-.07	.72
悲しい。	.03	.72
不自然だ。	.02	.71
演じられているようで嫌だ。	-.11	.70
信頼されていないように感じる。	.01	.68
友だちに気を使われている気がする。	.19	.66
友達を疑ってしまう。	.06	.65
気持ち悪い。	-.06	.60
友だちはつかれるだろう。	.19	.60
悪いことだ。	-.21	.52
因子間相関	1	2
	1	-.32
	2	

第1因子は、「ふつうのことだ」、「よくあることだ」などの項目が高い負荷量を示していたことから、「肯定的認知」因子 ($\alpha=.91$) と命名した。第2因子は、「本当はしてほしくない」、「友だちのことがわからなくなるようでこわい」などの項目が高い負荷量を示していたことから、「否定的認知」因子 ($\alpha=.90$) と命名した。

4. 考察

“自己” および “友人” の見せかけの自己表現に対する認知尺度の因子分析の結果、どちらも「肯定的認知」と「否定的認知」の2因子が抽出された。

「肯定的認知」因子は、堀田ら (2001) の見せかけの自己行動に対する肯定的感情と似た項目だが、“友人” の見せかけの自己表現に対しても同様の項目が得られた。石津ら (2008) は、“自己抑制的であっても他者志向的な適応方略を多くとる個人は、学校適応は保たれているが、その陰でストレス反応が蓄積されている可能性がある”と述べている。肯定的認知の中には「大切なことだ」といった見せかけの自己表現を適応方略として受けとっている項目が見られた。一方で、「しかたがないことだ」「よくあることだ」といった様に、消極的に肯定している項目も見られ、見せかけの自己表現に対する複雑な心境が窺える因子となっている。

「否定的認知」因子は、佐久間 (2003) の様々な関係に応じて変化する自己に対する否定的意識と近い内容になっている。本研究では、“自己” が “友人” に、“友人” が “自己” にと対象を絞ったが、結果として同じ様な因子が得られた。崔ら (1998) は、“青年期の友人関係において、ネガティブな感情表出を過剰に制御することは、表面上うまくやっているように思っても、本当に理解し合っているという充実感が得られない”としている。見せかけの自己表現には、マイナスの影響があり、中学生も「本当はやりたくない」「本当はしてほしくない」といった否定的な認知が見出されたのだろう。

Ⅲ 第二研究

1. 目的

“自己” および “友人” の見せかけの自己表現に対する認知とストレス反応との関連について性差を考慮に入れながら検討する

2. 方法

(1) 調査対象：第一研究と同様。

(2) 調査時期・調査手続き：第一研究と同様。

(3) 調査内容：フェイスシート…学年、性別。

“自己” の見せかけの自己表現に対する認知尺度…第一研究で作成。22項目、4件法。“友人” の見せかけの

自己表現に対する認知尺度…第一研究で作成。28項目、4件法。中学生用ストレス反応尺度…三浦(2002)が作成した中学生が表出するストレス反応を測定するための尺度。「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」「無気力」および「身体的反応」の4下位尺度から構成。20項目、4件法。

(4) 分析方法：

1) 見せかけの自己表現の認知に関する性差の検討

“自己”および“友人”の見せかけの自己表現に対する認知の下位尺度「肯定的認知」「否定的認知」に関して、性差があるのかを検討するため、 t 検定を行う。

2) 見せかけの自己表現認知による型(認知スタイル)の分類

“自己”および“友人”の見せかけの自己表現に対する認知の各下位因子得点によってクラスタ分析を行う。各下位因子得点は、それぞれの因子に含まれる項目の平均値を用いることとする。各認知スタイルの人数について χ^2 検定を行う。また、認知スタイルの特徴を探るため、認知スタイルを独立変数、“自己”および“友人”の見せかけの自己表現に対する認知の4つの下位因子得点を従属変数とした一要因の分散分析を行う。

3) 認知スタイルとストレス反応の関連

認知スタイルとストレス反応の関連、また性別の及ぼす影響を検討するため、認知スタイル(4)・性別(2)を独立変数、ストレス反応の総合得点を従属変数とした2要因分散分析を行う。

3. 結果

(1) 見せかけの自己表現の認知に関する性差の検討

“自己”および“友人”の見せかけの自己表現に対する認知の下位尺度である「肯定的認知」「否定的認知」に関して、性差があるかを検討するため、それぞれ t 検定を行った。その結果、“自己”においても“友人”におい

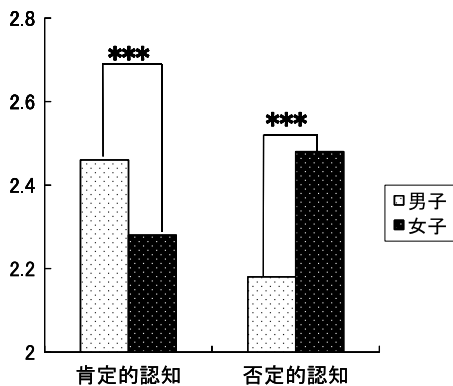


Fig.1 “自己”の見せかけの自己表現に対する認知

ても肯定的認知は、男子の方が高く、否定的認知は女子の方が高いという結果が得られた(“自己”の肯定的認知： $t_{(494)}=3.53$, $p<.001$ ，“自己”の否定的認知： $t_{(494)}=5.70$, $p<.001$ ，“友人”の肯定的認知： $t_{(494)}=2.83$, $p<.01$ ，“友人”の否定的認知($t_{(494)}=6.85$, $p<.001$)。それぞれの結果を Fig.1, 2 に示す。

(2) 見せかけの自己表現認知による型(認知スタイル)の分類

“自己”および“友人”の見せかけの自己表現に対する認知尺度の「肯定的認知」「否定的認知」の因子得点を用いて、クラスタ分析(Ward法)を行った結果、4つのクラスタ(以下、認知スタイルと呼ぶ)が得られた。また各クラスタの人数について χ^2 検定を行ったところ、有意な人数の偏りが見られた($\chi^2=224.44$, $df=3$, $p<.001$)。次に、得られた認知スタイルを独立変数、“自己”および“友人”の見せかけの自己表現の認知尺度のそれぞれ2つの因子得点を従属変数とした一要因分散分析を行った結果、すべてにおいて有意な群間差が見られた(“自己”の肯定的認知： $F_{(3,492)}=173.24$ ；“自己”の否定的認知： $F_{(3,492)}=221.07$ ；“友人”の肯定的認知： $F_{(3,492)}=152.80$ ；“友人”の否定的認知： $F_{(3,492)}=220.57$ 、すべて $p<.001$)。各認知スタイルのプロフィールを Fig.3 に、人数を Table 3 に示す。

第1クラスタは、“自己”・“友人”の見せかけの自己表現に対し肯定的認知は平均より少し高く、否定的認知は平均を下回っている。この型は、見せかけの自己表現を肯定的に認知している型であるため、「消極的肯定型」とした。

第2クラスタは、“自己”・“友人”の見せかけの自己表現に対し肯定的認知、否定的認知のどちらも平均より高い。この型は、肯定と否定の相反する認知を持ち合わせているため、「肯定・否定並存型」とした。

第3クラスタは、“自己”・“友人”の見せかけの自己

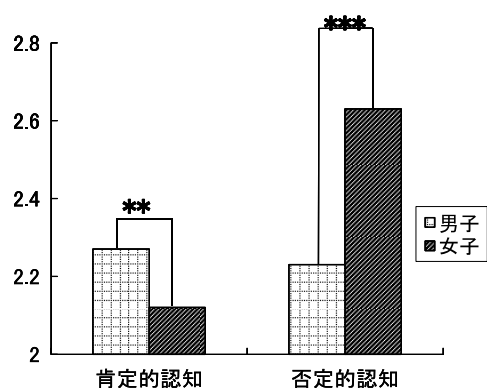


Fig.2 “友人”の見せかけの自己表現に対する認知

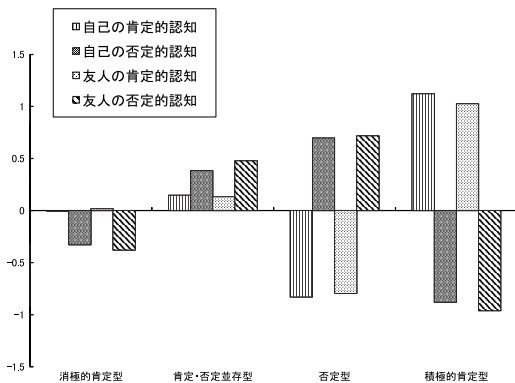


Fig.3 認知スタイルのプロフィール

表現に対し肯定的認知は4群の中で最も低く、否定的認知は4群の中で最も高い。よって、見せかけの自己表現に、否定的認知のみが高いという特徴をもつため、「否定型」とした。

第4クラスは、“自己”・“友人”の見せかけの自己表現に対し肯定的認知は4群の中で最も高く、否定的認知は4群の中で最も低い。よって、見せかけの自己表現に対し肯定的認知のみが高いという特徴をもつため、「積極的肯定型」とした。

(3) 認知スタイルとストレス反応の関連

認知スタイルおよび性別とストレス反応の関連を検討するために、認知スタイル(4)×性別(2)を独立変数、ストレス反応の総合得点を従属変数とした2要因分散分析を行った結果、交互作用が有意であった ($F_{(3,488)}=3.21, p<.05$)。各認知スタイルと性別によるストレス反応得点を Fig.4 に示す。

認知スタイルの水準における性別の単純主効果を検定したところ、「積極的肯定型」において性別の単純主効果が有意であり ($F_{(1,488)}=5.95, p<.05$)、男子よりも女子のストレス反応が高かった。また、性別の水準における認知スタイルの単純主効果を検定したところ、男子、女子ともに認知スタイルの単純主効果が有意であった (男子： $F_{(3,488)}=6.50, p<.001$ 女子： $F_{(3,488)}=3.97, p<.01$)。

Table 3
各認知スタイルの人数

	消極的 肯定型	肯定・否定 並存型	否定型	積極的 肯定型
男子	136	59	21	23
女子	111	92	47	7
全体	247	151	68	30

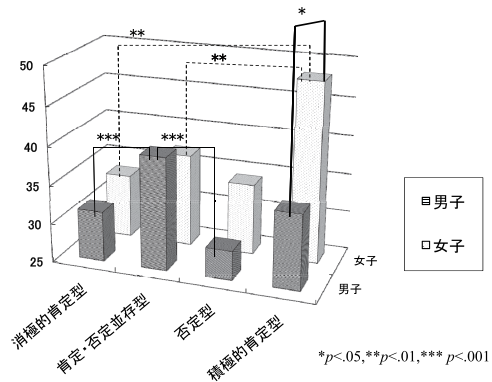


Fig.4 認知スタイルと性別によるストレス反応得点の平均値

Tukey の HSD 検定による 多重比較の結果、男子では「肯定・否定並存型」が「消極的肯定型」および「否定型」よりもストレス反応が高く ($Mse=163.18, p<.01$)、女子では「積極的肯定型」が「消極的肯定型」および「否定型」よりストレス反応が高かった ($Mse=163.18, p<.05$)。

4. 考 察

(1) 見せかけの自己表現の認知に関する性差について “女子の方がありのままの自分を出して付き合いおうとするのに対し、男子は内面を隠した防衛的なつきあい方をする” (長沼ら, 1998) とされる。女子に見られる、本音で友達と深く付き合いおうとするつきあい方は“自己”が“友人”に本音を見せることだけではなく、“友人”も“自己”に本音を見せてくれることを求めるつきあい方なのではないかと考えられる。また “女子は男子より全般的に友人に率直に自分の意見や考えを言ってほしいと思う気持ちが強い” (柴橋, 2001)。よって、女子は見せかけの自己表現に対して否定的認知が男子より高いと考えられる。一方、“男子の自己防衛的なつきあい方” (長沼ら, 1998) は、言い換えれば “自己” だけでなく “友人” も本音をださず、傷つけあうことを避けたいという気持ちであり、それによりどちらの見せかけの自己表現に対しても女子より肯定的認知が高いのではないかと考えられる。

(2) 見せかけの自己表現認知による型 (認知スタイル) の分類

“自己” および “友人” の見せかけの自己表現に対する認知尺度の因子得点を用いて、クラスタ分析を行った結果、4つの認知スタイルが得られた。

「消極的肯定型」は、4つの認知スタイルの中で人数が一番多い。“中学生は高校生に比べて、自分の気持ち

や考えを率直に伝える際に「配慮・熟慮」を強く感じている”（柴橋，2004）。よって、中学生の多くは見せかけの自己表現を人と付き合っていくための必要なスキルとして受け止めていると思われる。「肯定・否定並存型」は、肯定と否定の相反する認知を持ち合わせている。この型の中学生は、本音をだしあって親密になりたいという気持ちと本音を抑えて配慮しあうことも必要だという気持ちを持ち、葛藤状態にあると推測される。「否定型」は、否定的認知のみが高い。“自分の気持ちや考えを大切に、それを伝えることへの肯定的な価値観を持っている者は素直に「自己表明」し、相手にもそうあってほしいと思っている”（柴橋，2004）。以上のことより、否定型はお互い本音を出して付き合いたいという思いを持っていると思われる。「積極的肯定型」は、4つの認知スタイルの型の中で人数が最も少ない。現代の青年の友人関係の特質として、“内面的なかかわりを避け表面的な楽しさを追い求める傾向”（岡田，1995）が指摘されているが、この型は特にその傾向が強いのではないだろうか。

(3) 見せかけの自己表現に対する認知スタイルとストレス反応の関連

1) 認知スタイルの水準における性別の単純主効果について

「積極的肯定型」において、女子が男子よりもストレス反応が高かった。「積極的肯定型」は、どちらの見せかけの自己表現に対しても肯定的認知が高く、友人と付き合っていく上ではお互いが本音を抑えるなど配慮が必要であると思っている型である。よって、率直に自己開示しあうことができず、表面的な関係となってしまうと考えられる。“表面的な交友を営む女子は交友関係への不満が高い”（広実，2000）のために、男子に比べストレス反応が高くなるのだろう。一方、“男子は友達と一緒にいられれば自分らしさをだせないことは気にならず、自分を押し殺すことになる拒否不安が社会的スキルとして働く”（杉浦，2000）。つまり、この型の男子にとっては見せかけの自己表現は社会的スキルであり、お互いが本音を抑えていたとしても、友人と楽しく一緒にいられればよいから、ストレス反応をそれほど表出しないと考えられる。

2) 性別の水準における認知スタイルの単純主効果について

男子の「肯定・否定並存型」>「消極的肯定型」および「否定型」について

「消極的肯定型」と「肯定・否定並存型」の相違点として、見せかけの自己表現に対して否定的認知を持っているかどうかということが挙げられる。「肯定・否定並存型」の、見せかけの自己表現に対する否定的認知の高さは、本音を出して付き合いたいという気持ちを持って

いるためではないかと考えられる。杉浦（2000）は、“中学生は自分を押し殺すことになる拒否不安と親しい関係を維持したいという親和傾向とが未分化である”としている。「肯定・否定並存型」は、本音を出しあうことと見せかけの自己表現をしあうことで、葛藤を起しているため、ストレス反応が高くなっていると考えられる。

「否定型」は、肯定的認知は低く、否定的認知は高いという特徴をもつ。“男子が見せかけの自己行動に対して否定的意識を持つことは、友人関係の不適応感や自尊心に強く影響する”（堀田ら，2001）と示唆されていた。しかし、本研究で否定的認知だけを強く持ってモストレス反応にはそれ程影響しないという結果が得られた。堀田ら（2001）は“自己”の見せかけの自己行動という一方向から検討したが、本研究では“自己”だけでなく“友人”の見せかけの自己表現に対する認知という視点を加えた。「否定型」は、“自己”“友人”のどちらの見せかけの自己表現に対しても否定的認知が高く、お互い本音を出し合うような関係でいたいと考えているのではないかと推測される。そのような思いを持っている彼らのストレスが低いこととして、実際には見せかけの自己表現をとっていないことが考えられるため、否定型については、実際行っている友人関係における自己表現とあわせて検討する必要がある。

女子の「積極的肯定型」>「消極的肯定型」および「否定型」について

「積極的肯定型」に属する女子中学生は7名と少ないものの、4つの型の中で最もストレス反応が高かった。“女子は見せかけの自己に肯定的感情を持つことが適応感を予測し、見せかけの自己をどの程度受容できているかが、適応感を規定する”（堀田ら，2001）とされていた。しかし、肯定的認知が高い「積極的肯定型」の方が、「消極的肯定型」よりもストレス反応も高かったことから、肯定的認知が高いことが必ずしも見せかけの自己を受容することにつながるのではなく、肯定的認知の程度があまりに大きいと、ストレス反応が高く不適応に繋がるという新たな視点が得られた。「積極的肯定型」は、どちらの見せかけの自己表現に対しても肯定的認知が高く、友人とつきあっていく上でお互いが本音を抑えるなどの配慮が必要という気持ちを強く持っているのではないかと考えられる。“互いの関係を壊さないように一生懸命気を遣い、相手との距離をはかることに心を砕く子が多い”（伊藤，2006）といわれているが、「積極的肯定型」の女子は、友人とお互い気遣いをしあうようなつきあいとなり、結果としてストレス反応も高くなると推測される。また、女子の「否定型」もストレス反応をそれほど表出しておらず、男子の「否定型」と同様のことが考えられる。

IV まとめと今後の課題

1. まとめ

中学生は“自己”・“友人”のどちらの見せかけの自己表現に対しても「肯定的認知」と「否定的認知」を持つことが明らかになった。また、見せかけの自己表現の認知スタイルとして「消極的肯定型」、「肯定・否定並存型」、「否定型」、「積極的肯定型」の4つが見出され、認知スタイルにより表出するストレス反応に差異がみられた。見せかけの自己表現を適度に肯定的に認知している中学生は、比較的ストレス反応を表出していなかったが、肯定と否定の相反する認知を併せ持つ中学生はストレス反応が高く、彼らは本音をだしたいという気持ちと、本音を抑える事も必要だという気持ちの葛藤状況にあると思われた。また、あまりに高い肯定的認知を持つ女子は最もストレス反応が高く、不適応に陥る危険性が示唆された。自己表現は、友人とつきあっていく上で避けられないものであり、何ら問題を抱えていない様に見える中学生もストレスをためている可能性がある。よって、見せかけの自己表現に対する性別による認知の特徴、過度の肯定的認知、葛藤的な認知に注意しながら、中学生の友人関係に対して何らかの予防的援助を行う必要がある。

2. 今後の課題

本研究では、見せかけの自己表現に対する認知のみに着目したが、見せかけの自己表現に対する認知と併せて、友人関係における実際の表現の特徴を検討する必要があると思われる。また、見せかけの自己表現が実際の友人関係において、どのような場面でどのような形となって現われるのかについても検討することによって、より詳細に中学生の特徴をとらえることができるであろう。

謝 辞

本論文を作成するにあたり、貴重なご指導、ご助言をいただきました九州大学大学院人間環境学府、野島一彦教授、福留留美准教授に深く感謝申し上げます。

引用文献

- Blos, P. (1962): On adolescence Free-Press 野沢英司 (訳) 1971 青年の精神医学 誠信書房
 榎本博明 (1987): 青年期 (大学生) における自己開示性とその性差について 心理学研究, 58, 91-97.
 榎本博明 (1997): 自己開示の心理学的研究 北大路書房
 Erikson, E. H. (1950): Childhood and society. Norton.(仁科弥生訳 1977・80 『幼児期と社会 1・2』 みすず書房)

- 広実優子 (2002): 現代青年における交友関係の特徴及び性差 親友との親密感・満足度, 自己受容性, 社会的スキルとの関連 日本青年心理学会大会発表論文集, 10, 34-35
 堀田仁美・無藤 隆 (2001): 青年期における見せかけの自己行動と友人関係の適応感, および精神的健康との関連 お茶の水女子大学発達臨床心理学紀要, 3, 79-91.
 池田智子 (2003): 自己開示と精神・身体的健康の関連に関する研究展望 安田女子大学紀要, 31, 75-85.
 石津憲一郎・安保英勇 (2008): 中学生の過剰適応傾向が学校適応とストレス反応に与える影響 教育心理学研究, 56, 23-31.
 伊藤美奈子 (2006): 不登校の子の理解と援助(2)不登校の子どもの気持ち 児童心理, 60(7), 697-703.
 Jourard, S. M. (1971): The transparent self. New York: Van Nostrand Reinhold.(岡堂哲雄訳 1974 透明なる自己 誠信書房)
 松島るみ (2004): 青年期における自己開示を規定する要因の検討 風間書房
 三浦正江 (2002): 中学生の学校生活における心理的ストレスに関する研究 風間書房
 三浦正江 (2006): 中学校におけるストレスチェックリストの活用と効果の検討: 不登校の予防といった視点から 教育心理学研究, 54, 124-134.
 諸富祥彦 (1999): 学校現場で使えるカウンセリング・テクニック上 誠信書房
 長沼恭子・落合良行 (1998): 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, 10, 35-47.
 落合良行・佐藤有耕 (1996): 青年期における友達のつきあひ方の発達の变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
 岡田 努 (1995): 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
 岡田 努 (1999): 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, 47, 432-439.
 大久保智生 (2005): 青年の学校への適応感とその規定要因 青年用適応感尺度の作成と学校別の検討 教育心理学研究, 53, 307-319.
 奥野誠一・小林正幸 (2007): 中学生の心理的ストレスと相互独立性・相互協調性との関連 教育心理学研究, 55, 550-559.
 崔 京姫・新井邦二郎 (1998): ネガティブな感情表出の制御と友人関係の満足度および精神的健康との関係 教育心理学研究, 46, 432-441.
 佐久間路子 (2002): 関係の自己の可変性の理解: 大学

- 生と主婦の比較 お茶の水女子大学人文科学起用,
55, 307-317.
- 佐久間路子 (2003): 大学生における関係的自己の可変性 教育心理学研究, 51, 33-42.
- 佐久間路子 (2006): 幼児期から青年期にかけての関係的自己の発達 風間書房
- 柴橋祐子 (2001): 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち 発達心理学研究, 12, 123-133.
- 柴橋祐子 (2004): 青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因 教育心理学研究, 52, 12-23.
- 渋谷郁子・伊藤裕子 (2004): 中学生の自己開示 自己受容との関連で カウンセリング研究, 37, 250-259.
- 杉浦 健 (2000): 2つの親和動機と対人的疎外感との関係 その発達の变化 教育心理学研究, 48, 352-360.
- 吉岡和子 (2001): 友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から捉えた友人関係の満足感 青年心理学研究, 13, 13-30.
- 吉岡和子 (2007): 友人関係における“自己の在り方をめぐる葛藤”に関する研究 九州大学心理学研究, 8, 195-200.
- 和田 実 (1995): 青年の自己開示と心理的幸福感の関係 社会心理学研究, 11, 11-17.
- 渡部玲二郎・出谷浩一 (2006): 中学生の友人関係において不適応をもたらす見せかけの自己行動 茨城大学教育実践研究, 25, 213-225.